26PB-am297

実務事前実習における patient-oriented に関連する潜在因子探索の試み

○小野 真一[1], 亀井 美和子[1], 松田 美和[1], 泉澤 恵[1], 林 宏行[1]（[1]日本大薬）

【目的】医療薬学にピボットを置く 6 年制薬学部の実務事前実習では、patient-oriented の意識を学生に植え付けることが必要である。このために必要な潜在因子を探った。

【方法】臨床症例を題材とした SGD の進行を、提示した疾患の理解、その患者の持つ問題点の推測と解決策の提案の如く、時系列を意識させて進めた。その間にフィジカルアセスメント、バイタルサインの測定を体験させ、最後に提示症例に関連したデバイス（ピークフローメーター、スモーカライザー、パルミコートやサルタノールのインヘラー、血糖測定）の使用体験をさせた。各 SGD の最後に 50 項目からなる振り返りシートを記入させた。4 年生 242 名の回収率は 100%で、記入に不備の無い 231 名（男性 121 名、女性 110 名）分を対象とした。SMC 法で共通性が 0.3 未満の 20 項目を削除し、残った 30 項目について探索的因子分析（スクリープロットにより因子数を決定、主因子法（反復解法)、バリマックス回転）を行った。

【結果】3 因子が抽出された。因子負荷量 0.5 以上の項目を各因子の構成項目とした。第 1 因子（10 項目）は自己と他のグループメンバーの洞察と課題への取り組み、第 2 因子（4 項目）はこの実習スタイルの好き嫌い、第 3 因子（8 項目）は事前実習、実務実習、卒後など臨床への有用性に関連するものであった。寄与率はそれぞれ 19.5%、13.8%、13.3%であった。第 4 因子までの抽出を試みたときに、初めて患者の問題点への対応に関する因子（3 項目）が抽出された。

【結論】patient-oriented の意識は、今回の結果に見る限り、単に臨床事項を前景とした実務事前実習だけでは成就し難いことが示唆される。